

## 昭和の歌姫

野瀬 隆平

バス停で突然、歌い出した。

山の牧場の 夕暮れに

雁が飛んでる ただ一羽

周りの人たちが、一斉にこちらをふり向く。歌っているのは、まだ小学校に入る前の我が息子だ。今から、50年も前の話である。

美空ひばりの「あの丘越えて」の歌いだしの部分であるこの歌詞、息子が生まれるより遙か昔、デビューして間もないころ流行った歌であるから、ラジオやテレビで聴いて覚えたのではない。私自身がしょっちゅう歌っているから、覚えてしまったのだ。バス停の周りで聴いた人もそれが分っている。だから、歌っている子供よりも、むしろこの歌を好んで口ずさむ父親が、どんな男かと関心を抱いたに違いない。こちらの好みを見透かされたようで、恥ずかしい。

戦後、娯楽のあまりなかった時代、ラジオを聴くのが楽しみだった。多くの歌謡曲を知らぬ間に覚えてしまった。今日でも、メロディーやイントロをきくと、口をついて出てくる。このような流行歌の歌詞を、いくつくらい覚えているだろうか。数百、いや千にも及ぶのではないだろうか。

ラジオやテレビの番組でナツメロと称して流れて来る曲は、ほとんど知っている。しかし、たまに聴き馴染んでいない歌がある。そこで気がついたのは、そんな曲が流行していた時期が、ちょうど海外に住んでいた時期と一致することだ。海外では日本で流行っている歌が聴けなかったから当然であろう。

さて、憶えている歌でどの歌手のものが多いただろうか。明らかに美空ひばりの歌である。昭和24年にデビューした頃の「悲しき口笛」から、最後の「川の流れのように」まで、ひばりが歌ったオリジナルの曲は、全部でゆうに300曲は超えているだろう。勿論、すべて憶えている訳ではないが、多くの歌詞を思い出すことが出来る。思い出の中にある冒頭の「あの丘越えて」もその一つである。

平成元年、昭和天皇が崩御された年の6月24日に、ひばりはこの世を去った。まさに、昭和を象徴する歌手であった。奇しくも今日は命日である。